

 書評

大東祥孝 著

山鳥 重, 河村 満, 池田 学 シリーズ編集

《神経心理学コレクション》

精神医学再考

神経心理学の立場から

笠原 嘉

精神医学への果たし状？

久しぶりに読みごたえのある書物に出会った、というのが読後の第一印象である。

その上、「神経心理学コレクション」という名の知れたシリーズの一卷として出版された本書は、こともあろうに『精神医学再考』と銘打たれている。いってみれば神経(心理)学サイドから精神医学サイドへ投げられた質問状、いや果たし状かもしれない。事実、著者はあとがきの中で「率直にいえばかなり挑発的に書き上げた」と告白している。精神科医としては一読しないわけにはいかない。

神経心理学という名称は後期高齢者に入った私にはなつかしい。秋元波留夫の『失行症』（金原商店）は 1935 年と早い。大橋博司の大著『失語・失行・失認』（医学書院、1960）、その増補版『臨床脳病理学』（医学書院、1965）は当時の日本の水準を示して燦然としていた。この学問は「脳に局在する精神心理症状」を選択的に扱う。大脳右半球の機能の特徴、左半球のそれとの違い、さらには前頭葉の底面（すなわち眼窩脳）に特徴的な心理症状など、そういう視点の研究だった。

私事で恥ずかしいが、私も当時の精神科の雰囲気染まって、故岡田幸男氏（元近畿大学精神科教授）に教をこいながら、脳幹出血の人の身体図式障害について初歩論文を 2 つ書いたことを思い出す。他方で、統合失調症の精神療法研究に苦闘しながらだった。当時の精神病理学と神経心理学の距離はその程度のものだった。

ところが、神経心理学の重心はいつの間にか神経内科学へ移った。多分、1965 年前後に日本精神神経学会から日本神経学会が分離独立したことに関係

している。そして今や（といってもほんのこの十年くらいだが）他者理解、自己理解、社会脳といった新しいコンセプトとともにパラダイム・シフトが起こり、医学の枠を超えて学際的になった。著者の言葉では社会認知神経心理学になった。

「社会」という言葉が神経学の中に入るこの変化を私は好ましいものに思った。というのも、1965 年以降の精神医学がいつのまにか生物学的精神医学と心理学社会的精神医学の 2 大政党(?)に分かれて、両者が互いを排除し合うかのような状態にあることを案じ、お互いの共通部分として「社会性」をキーワードにお互いが接近の努力を払えないものか、その仲介は神経心理学の役割ではないか、などと言ったことがあった（精神神経学雑誌 96, 1994）。「神経心理学者の失笑を買うことを覚悟していえば、失語、失行、失認ならぬ失社会性中枢という機能が脳のどこかに局在しないか。そこが機能回復すれば心的エネルギー水準が回復する。そういう中枢があるなら生物学派と心理学派を繋ぐことができる」。おくれればながら 2004 年に神庭重信先生の論文で「社会脳」という新語を発見したとき、私が感激したのはそういう経緯があったからである。

自然科学的手法からともすれば離れがちになる我々にとって、神経学の陣中にあるとはいえ神経心理学は最も親しい旧友である。残念ながら今日の神経心理学会の中には精神病にまで臨床経験のある精神科医は少ないらしい。著者は数少ない一人で、しかも濱中淑彦、故田邊敬貴らとともに上記大橋の高弟である。巻末をみると精神科医の目に触れにくい雑誌にも多数の投稿がある。

前置きが長くなったついでに、もう一言お許しあれ。

本書をひもとけば、冒頭から Henri Ey (1900-1977) が出てくることに気付かれよう。この仏人を私も 20 世紀において精神医学の思想を作った唯一の人、と評価する。一例を挙げると、彼の「器質・力動論」(オルガノダイナミズム)は我々の薬物療法重視の営為を説明してあまりある。軽いケースにさえ脳に働く抗精神病薬を躊躇なく使い、他方で小精神療法として患者—医師関係にも一定の注意を払いつつ、長い経過を追う。日本の健康保険下でないといけない営為である。

その上、1974 年の「意識野の解体」と「人格の解体」という分類は(本書の p 63)、DSM 的公衆衛生学分類の時代にあっても、平行して考えるに値する臨床の実用性を持つ。私も本書に刺激されて Ey の日本における再評価を願わずにはいられない。

本書はとても読みやすいから、これ以上の解説は不要と思う。

神経心理学にあまり詳しくない人なら第 12 章「臨床病態の諸相」から読まれるのを勧めする。ここには平素あまり出会わない次のような病態が自家例を基にわかりやすく述べられている。1) 全生活史健忘、2) 失声(転換性障害)と解離性健忘、3) 妄想知覚、4) アスペルガー障害、5) 病態失認—身体図式と身体意識の区別など。どれも平均的な精神科医の神経学的教養を高めるのに役に立つ。

Ey を知りたい方は第 13 章がよいだろう。「意識の病理」と「人格の病理」の 2 系列の要を得た解説に加えて、わが国の非定型精神病(満田)概念、鳩谷竜のてんかんから統合失調症に至る内因性精神病

全体の鳥観図(p 164)もある。

その前の第 9 章『「心因」という虚構について』を読み飛ばすわけにはいかない。ここは結構きつい精神医学批判だから。Ey に心酔する私はほとんど同意できるが読者によってはどうだろう。ご自分の使う心因概念の再考を求められることは確かだろう。

第 10 章『「自己」という虚焦点について』は Lacan を論じる精神病理学者 2 人の説を引用しながらの説明で、新味があってわかりやすい。著者の眼はこの辺りにも届いている。

最後に本書への反論を、と考えていたが残念ながら紙数が尽きた。

1 つだけにしたい。かねてから神経学には長期経過への関心が精神医学に比して薄いと感じていたが、本書にも同様の印象を持った。お人好しにすぎるかと思いつつ、精神科医たちは病人に人格の成長とか成熟を期待する。神経心理学はこれをどう扱うのだろう。レジリアンス(回復力)といった既設の装置の発動だけで説明するしかないのか。脳から心への通路の逆、心から脳へという通路は全く考えられないのか。

いずれにしろ、近来まれな好著の諸兄姉のご一読をお願いする。

(桜クリニック院長/名古屋大学名誉教授・精神医学)

●A5 208 頁 2011 定価 3,570 円(本体 3,400 円+税) 医学書院